

2012年1～2月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
 初風呂にのばせば手足長くなる
 見たやうな見てなきやうな夢初め
 墨堤に行く卯の札をふところに
 鶯の森へ耳より入りゆく
 夜は雪にしづもるバレンタインデー

横浜 下島 緑
 わたつみの呑みこんでゆく冬落輝
 海原に明日は初日となる落輝
 人波に従ひゆくや初詣
 松過ぎの旅南へ荷の軽く
 ささめいて女正月口ゼワイン

藤沢 藤田 富子
 顔見世や歌舞伎絵巻の幟立つ
 冬茜富士あざやかなシルエット
 木枯しや路地小走りに通りけり
 さざんかを散らして過ぎる風強し
 夢求め歳末ジャンボ買ふ列に

さいたま 宮崎 美智子
 目を見張るからくり人形冬うらら
 円空仏笑顔になじむ冬館
 酉の市なにはともあれ厚着せむ
 八木節の本場へ誘う空っ風
 緩みなく張る雪吊りの清々し

綾瀬 岡田 洋子
 猫じゃらし枯れて小春の日を揺らす
 湯豆腐の黒衣となりて昆布かな
 銀杏散る真青なる空広げつつ
 鮮やかに寒鰯捌く手際よさ
 ポインセチアはみ出す花舗の華やげる

町田 小森 まさひこ
 夢と書く二千十一年の年賀状
 黄水仙今年よきこと多くあれ
 ランナーや三が日二日間のテレビ漬け
 寒夕焼け山くっきりして近く見ゆ
 どんどの火高きに行けと幸願ふ

2012年3～4月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
 待ちわびし花の日和となりにけり
 うすき日に光の粒となる落花
 緩みゆく色にほぐれてゆく木の芽
 花過ぎの風の見えなくなりけり
 春風に問ふ希望とは闘志とは

横浜 下島 緑
 凍蝶に伸ばした指を止めけり
 寥々として雨音にある余寒
 白魚の眠くるぐる炊かれけり
 があがあと家鴨群れゆく春の泥
 句座終へてゆく神楽坂春灯

藤沢 藤田 富子
 潮鳴りに立ち向ひたる野水仙く
 大寒の風もろに受けよろけをり
 霜柱子供のように踏んでみる
 寒の雨外に出ることなく侘し
 待つほどに寒さ緩まずこもりをり

さいたま 宮崎 美智子
 咲き初むる紅梅の香に目を閉す
 針供養忘るるほどに針持たず
 吊雛万の数揺れ雛の町
 一の午三方に載る油揚
 一の午参道に買ふ稻荷寿司

綾瀬 岡田 洋子
 湯たんぽの温もりやさしよき眠り
 干蒲団日向に匂ひ抱へ込む
 うち晴れてゆるびなかりし雪の富士
 寒風の浅草巡る人力車く
 蠟梅の蕾解かるる日差かな

町田 小森 まさひこ
 飯蛸の皿座布団に胡坐かく
 薔見れば剪定鋏の音鈍く
 茶髪減り特攻服なく卒業式
 地震(ない)の国台風の国に花開く
 人去りて人来て4月の始まりぬ

2012年5～6月掲載分

- 習志野 大慈弥 爽子
あぢさゐを活けて本物めく小壺
小面の憂ひに深き梅雨湿り
走り茶の映ゆる白磁を掌
父の日や息子五人に嫁五人
摺り足に闇を動かす薪能
- 横浜 下島 緑
こまやかに百花に降りて春の雨
山鳩の声のくぐもり花は葉に
子の走る早さに廻り風車
まだ眠り覚めざる萩の若葉かな
七十路もなかばになりぬ更衣
- 藤沢 藤田 富子
何が好きと言はれて一つ桜餅
目刺食ぶ始まる朝の元気づけ
ボール蹴る子等に春風やはらかし
蝌蚪の群子供らたもで追いまわす
花冷えに季節も何もなく厚着
- さいたま 宮崎 美智子
スカイツリー一囲む桜の爛漫に
桜色こよなく愛づる色ならむ
春祭り小江戸の行事多彩なる
囀りを浴びて山門くぐりけり
門閉し落花の庭となにりけり
- 町田 小森 まさひこ
薫風を切っ裂く魚のまた一つ
椎落葉古城の道に振り止まず
山肌を明るく染めて椎の花
果て見えぬ一直線の新樹道
鳳凰の立つ新緑の大寺院

2012年7～8月掲載分

- 習志野 大慈弥 爽子
ビールほす喉のうごきに見ゆ旨さ
舳先今蓮田の風にすべりこむ
昼月に晩夏の翳り濃き流れ
たふれ咲く百合の匂の重くあり
大南風帆船海を傾ける
- 横浜 下島 緑
遊船の昼を舳ひて隅田川
露地奥の暮らしに咲いて茄子の花
形代に書きし齡に嘆息す
十葉の花の空き地の売り出され
コンビニの軒を巢立ちし燕の子
- 藤沢 藤田 富子
夏空を舞ひつつ悪さする鳶
若衆の祭りにかける心意気
雨上がり雲を二分に虹かかる
静寂の竹林渡る初夏の風
夏霞スカイツリーの見えかくれ
- さいたま 宮崎 美智子
鮎狙ふ野鳥の狙ひあやまたず
衣更てお洒落ごごろの浮き立ちぬ
草茂る平家の里に味噌を買ふ
藤房の重り合ひて色深む
浅間嶺を親しくの眺む辰雄の忌
- 町田 小森 まさひこ
防人の万緑の下に消へし道
里人の守る流れに蛍飛ぶ
梅雨寒し言葉は何も意味持たず
強梅雨に日本列島耐へており
子に繋ぐ近所付き合い夏祭り

2012年9～10月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
目瞑れば身の沈みゆく虫の闇
秋高くさへぎるものの無き深さ
やすやすと引き受け夜なべすることに
旧曆にするす露けき世の書簡
ショコラケーキにフランスの秋の声

藤沢 藤田 富子
夕焼に富士黒々と影絵めく
育ちゆく青き棚田を渡る風
日中をさけ昏れそむる頃墓参
ねこじゃらし勝手気ままに風に揺れ
水打てば風に暑さの戻りけり

さいたま 宮崎 美智子
戸隠の風心地好き木下闇
岩清水しびるる程に手を冷す
山車に添ひ袵姿巡行す
夏祭縁起のうちわ賞ひけり
粹好み祭ゆかたの男衆

町田 小森 まさひこ
深夜運転にそなえうつ伏す夜学生
茎太く色白にして男郎花
露置いて垂れ下がりたる蜘蛛の糸
野良猫のしっぽ立てをり初嵐
噴煙の山を配して赤とんぼ

2012年11～12月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
とれさうもなき烏瓜だけ残る
袴着の袖ふりねだるあんず飴
火伏護符添へて手を打つ三の酉
忘れ得ぬ日々を栞りて年忘
悶絶の硬さによじれ鱈乾く

横浜 下島 緑
戦無き世に住み慣れてさつまいも
出席と返事投函いわしぐも
踏むに惜し草の錦を除けてゆく
献立は鍋ものと決めやや寒し
冬支度終ひ支度ともおもひつつ

藤沢 藤田 富子
散歩道とんぼ群れみる空茜
一握の砂さらさらと秋の浜
萩垂るる奥に地蔵のひっそりと
歩を速むつるべ落としの散歩道
爽涼に枕高々眠りをり

さいたま 宮崎 美智子
美しきもの会席膳の秋景色
秋袷着こなし若き女将かな
秋雨の降るも上がるも気のつかず
鶺鴒高音外出の前に耳を貸し
句碑の前吹く山風の爽やかに

町田 小森 まさひこ
初しぐれの雪となりたる露天の湯
冬霞抜けて都心の摩天楼
渡り鳥の憩ふ湖冬うらら
クリスマスになくはならぬクロスビー
丹頂の雪に舞ひたる小半時